

## 2. シカゴの成長

- ・都市の社会学的研究は、20世紀初頭のシカゴで始まった。
- ・19世紀後半、アメリカでも産業革命によって、都市が急速に成長。
- ・この時期、英独仏で社会学が発展、アメリカに導入される。
- ・やがてアメリカ独自の都市研究がシカゴを舞台として発展した。

### ●シカゴ：中西部、ミシガン湖畔の大都市。

人口約 300 万人（1990 年 2,783,726 人、2000 年、2,896,016 人）。全米第 3 位。

Windy City, Great Country, My kind of Town, The City of Neighborhood.

### ●シカゴの誕生物語

1673 年 フランス系カナダ人 Louis Jolliet とイエズス会の宣教師 Jacques Marquette が、シカゴを通過。

1770 年代 黒人商人 Point du Sable が住み着き、先住民と毛皮の交易を開始。  
〈湖畔の港町として発展〉

1795 年 先住民がシカゴ川河口 6 マイル四方を連邦政府に割譲（グリービル条約）。

1804 年 ディアボーン砦設置（North Michigan Ave. and Wacker Drv.）

1812 年 ディアボーン虐殺事件。先住民が白人を急襲。米英戦争中。背後に英国の影。

1816 年 ディアボーン砦再建。イリノイ州誕生。

1830 年 碁盤状の街路整備。

1831 年 人口 60 人。

1832 年 ブラック・ホーク戦争（ウィスコンシンの西で、東進中のソーク族を殲滅）。

1833 年 人口 350 人。

1837 年 シカゴ市誕生。人口約 4000 人の「大平原の港町」。

1840 年 人口 4,470 人。

### ●初期シカゴの発展

五大湖からミシシッピ川につながる水運の結節点として発展。

1850 年代に大陸横断鉄道の整備。シカゴは東部・南部と鉄道で結ばれ、鉄道網の結節点（railroad capital）として大都市への道を歩み始める。

1850 年 人口 29,963 人。ガレア・アンド・シカゴ・ユニオン鉄道開通。

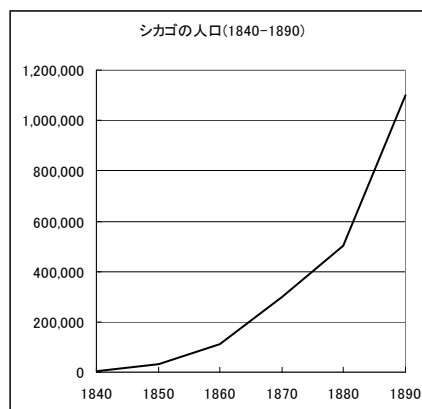
1852 年 東部と鉄道で結ばれる。

1860 年 人口 112,172 人

1870 年 人口 298,977 人

1880 年 人口 503,185 人

1890 年 人口 1,099,850 人



### ● 19 世紀後半のシカゴ

中西部の穀倉地帯から、小麦、トウモロコシ、食肉などを集荷。シカゴで加工・包装されて東部に出荷された。

1865 年には、ユニオン・ストックヤード（巨大な家畜置き場）が操業開始。

1871 年には、50 万頭の牛と 240 万頭の豚を受け入れていた。

五大湖を通じて鉄鉱石・木材が運び込まれた。

鉄：製鉄・機械（鉄道車輛・農機具）の工業原料。

木材：工場や住宅の建材、鉄道の枕木。

とくに農機具・鉄道車輛などが、シカゴの製造業の基礎をなす。

東部からは資本と労働力が流入。シカゴ市民の約半数は、外国からの移民。

1850 年代～ 60 年代：ドイツ、アイルランド、イングランド、スコットランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フランスなどから移民が流入。

民族ごとに集まって住み、出身国の言語で生活することができた。

1850 年代：初期の郊外住宅地の発展。エバンストン、レイク・フォーレストなど。

排水問題→都市のかさ上げ工事（1855 年～）。

困難に果敢に立ち向かうシカゴの精神を伝えるエピソードとして語り継がれる。

### ●シカゴ大火

1871 年 10 月、シカゴ大火。木造建築物が密集していたシカゴ中心部をなめつくし、市民の約 3 分の 1 が焼け出された。

出火地点は、シカゴ市南西部デ・コヴァン街のオレリー夫人の家。

出火原因は、オレリー夫人の牛がランプを干し草に蹴り込む。

南西の風にあおられて、都市中心部に広がる。

中心部で焼け残った「ウォータータワー」は、1869 年につくられた給水塔。現在でも、ウォータータワーは水道局の施設兼観光案内所として使われている。

その後、シカゴ中心部は、鉄と石でできた高層建築が建てられるようになった。

ルイス・サリバンなどの「シカゴ派建築」の摩天楼が林立するようになる。

### ●新しい移民の波

1870 年代～ 90 年代。新しい移民の波。ポーランド人、チェコ人、東欧系ユダヤ人、イタリア人など。東欧・南欧の貧困な農民が流入。ダウンタウンの周辺に民族的居住地を形成。シカゴは、荒々しく活力のある都市となっていく。

「都市が成長し、より古い住民が都市の外側に移住していくにつれて、中心地区はただちに新しい来住者によってみだされた。実際、彼らは空いた土地を手に入れたばかりか、たちまち密集と過密がいつそう激しくなった。1890年までにシカゴの人口の78%が外国生まれか、あるいはその子どもたちであった。ほとんどの人びとは、この国にやってきたときには裸一貫で、大都市の生活に慣れていなかった。だから、彼らは、自分と同じ人びとと交友と慰めを求めた。もちろん、都市のある部分は、すでに強烈な民族的色彩を醸成させていた。大量の新しい移民は、この傾向を加速した」(Mayer and Wade 1969, p.152)。

シカゴは、民族問題、貧困問題、犯罪問題などの集積地になる。——シカゴ学派都市社会学の舞台。

### ●コロンビア博覧会

1893年、新大陸発見400周年を祝う万国博覧会「コロンビア博」が開催された。会場は、シカゴ南部のジャクソン・パーク。「ホワイト・シティ」と呼ばれる荘厳なユートピア都市を演出。「ミシガン湖畔の牛の品評会になるのではないか」という東部人の揶揄をよそに、2500万人の人びとが博覧会の興奮に酔いしれた。

博覧会の期間中に、1880年代からの好景気は終わりを告げ、アメリカ合衆国は不況に襲われた。シカゴでも失業者が溢れ、会場の外には「グレー・シティ」が広がっていた。

博覧会でシカゴを訪れた人びとは、ホワイトシティとグレーシティのコントラストに衝撃を受けた。博覧会はシカゴの社会問題を印象づける結果となった。

シカゴは、アメリカ資本主義の発展の善と悪を極端に見せつける都市となった。歴史家のブリッグズは、当時のシカゴを「衝撃都市 (shock city)」と呼んだ。

「ジュリアン・ラルフは、バーミンガムを『世界で最も良く統治された都市である』と述べているが、シカゴについてはつぎのように言っている。『大都市を見ようと期待している明晰な頭脳の持ち主なら、ここに、あらゆる前例のなかに彼らが探し求めているものとは違ったものを見いだすであろう』と。それは、新しい現象、予兆、すなわち頭脳明晰な者が世界を理解しようと望むのならば訪れなければならない場所と考えられていた。同時にそれは衝撃都市であった。それは問題の中心地、とくに民族問題と社会問題の中心地であり、訪れる者にそれぞれ違った反応を喚起する場所であった。ラディアード・キプリングは、シカゴを見て『二度と絶対に見たくない』と言った。しかしW・T・ステッドは1894年に、シカゴが『世界の理想の都市』となるかどうかについて言うのは時期尚早だが、すでに『その機会は足下にある……シカゴ市民は、自らの運命についての信頼に満ち満ちている』と述べている」(Briggs 1963, p.80)。

### ●労働運動と社会改革運動

シカゴは、労働運動と社会改革運動の中心地。

## 労働運動

1886 年、ヘイマーケット事件。労働者が 8 時間労働制を要求するゼネストを起こす。警察による弾圧をきっかけに、爆弾が炸裂。→メーデー（5 月 1 日）の起源となる。

1894 年、鉄道車輛製造会社プルマンでストライキ。全国的な鉄道労働者のストライキに。

1905 年、IWW（世界産業労働組合）の結成大会がシカゴで開かれる。

## 社会改革運動（リベラル・プロテスタントによる社会改良運動）

1889 年 ジェーン・アダムズのハルハウス（セツルメント）が設立され、スラムの改良に取り組む。

スラムの実態を暴露するジャーナリズムや社会調査運動（social survey movement）も盛ん。

→社会改革運動に関わる知識人（多くは牧師）が「社会学」を生み出す。